

地域活性化と津波防災の両立を目指したまちづくり
～防潮堤を上回る高さの津波が想定されている福良の事例～

1. 研究目的 東日本大震災では、当時の既往最大規模を念頭に想定されていた津波の高さを大きく上回る巨大津波が発生し、戦後最大規模の人的被害となった。同津波災害以降、我が国ではいのちを守るという観点から数千年に一回というような低頻度巨大津波が想定されるようになった。従来の想定では対象とならなかったような高所や内陸の多くの住民に避難の意識をもたらした意義は大きい。しかし、防災意識は維持管理が困難なものであるため、恐れるという意識の変化だけでいつ起きるか分からない将来の巨大津波災害の犠牲を減少させることは容易ではない。本研究では、防潮堤を上回る高さの津波が想定されている兵庫県南あわじ市福良地区の東日本大震災後の津波防災まちづくりを考察することを通じて、これからの津波防災まちづくりのあり方を提案する。

2. 研究内容 人口約 5,454 人（平成 25 年 4 月末現在）の福良地区は、フグや鯛の養殖などの漁業、鳴門の渦潮や人形浄瑠璃などを目玉とした観光業が盛んである。同地区の防潮堤は、観光業などへの配慮から、天端高 2.95m で整備されている。昭和南海クラスの津波や計画高潮であれば被害抑止効果が期待される。しかし、兵庫県が想定している安政南海クラス T.P.5.3m、2011 年東北クラス T.P.8.1m であれば、まったく高さが足りない(図-1)。そうした中、平成 23 年度より「観光と津波防災を併せた、まちの活性化と防災力の向上」を目指して、「福良港津波防災ステーション運営協議会」を核に津波防災の推進を図っている。例えば、沿岸エリアに集中しがちな観光客をまちなかに誘導するためのまち歩きマップを作成している(図-2)。中長期的に安定して観光客がまちなかに誘導されるようになれば、自然とまちなかの整備が促され、古くなった空き家の減少や避難路となる道路の維持管理が期待される。また、平時から住民や観光客を高所に誘導できるように高台公園（展望台）の整備も進められつつある。また、「津波防災日本一」を目指している点も注目に値する。観光客に津波の危険があることを隠すのではなく、安心して観光が楽しめるまちづくり・ひとづくりを進めていることを前面に押し出すことで、津波防災の取組み自体を観光地の新たな付加価値として内外に認知させる試みである。現在、同地区への津波防災に対する視察が増加しており 3 年間で 6 万人を超えた。津波防災の取組みが、これまでになかった観光客の確保に繋がっている可能性がある。このように、福良では防潮堤の高さが想定されている津波よりも低いことが、観光客に安心を提供する観光地としての新たな価値観の発見をもたらし、地域の防災力の向上と地域の活性化の両立をめざすまちづくりに繋がっていると考えられる。

3. 主要な結論 当初、観光と防災の両立を目指して始まった福良の津波防災まちづくりは、現在までに教育や伝統文化、商業などの分野が主役となる防災の取組みへと発展している(図-3)。例えば、地元名産のそうめんは、古くなると味が良くなる上に、いざというときに簡単に茹でて食べることができるため、災害時の非常食として有用である。その点に着目し、現在、南あわじ市では備蓄倉庫にそうめんが備蓄されている。古くなったそうめんは訓練などの際に、学校や保育園などに提供される予定になっているため、持続的な需要が生まれている。以上のように、地域の活性化と防災対策の推進とを両立させることで、多様な分野と津波防災とが結びつき、防災対策効果が持続的にまちやひとに蓄積する仕組みとなっている福良モデルは、これからの津波防災まちづくりの一つのあり方ではないかと考えられる。なお、同地区の津波防災まちづくりは、平成 26 年度より上述の協議会体制からまちづくり推進協議会を核とした取組みへと発展する予定である。

(想定されている津波の高さ)
> (堤防の高さ)

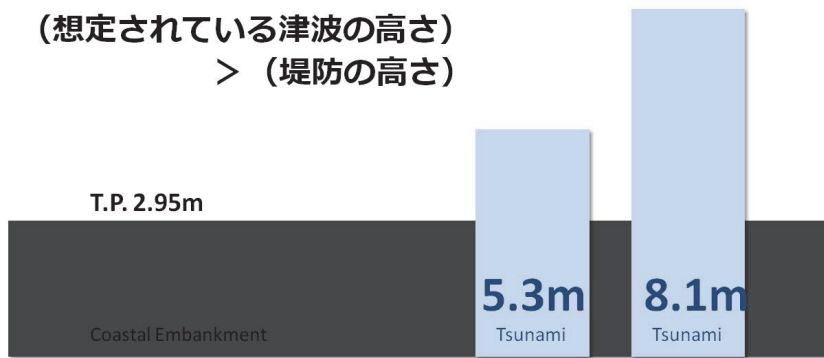


図-1 福良の堤防の天端高と想定されている津波の高さ



図-2 津波防災日本一のまち！福良まちあるきマップ
(出典:福良港津波防災ステーション運営協議会)

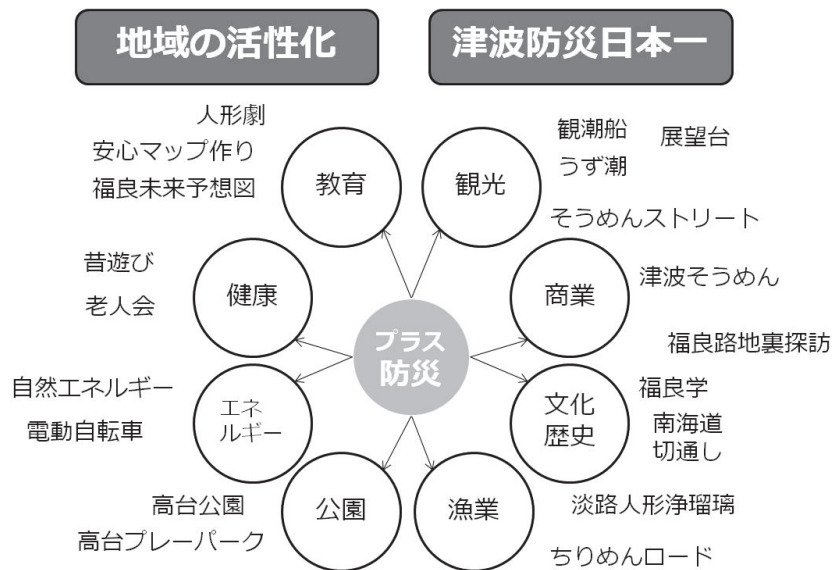


図-3 福良モデルの津波防災まちづくりのイメージ